

## 12.豪雨災害の怖さ

雨、雪が短時間に集中すると水災害が発生します。この水災害は、かつては河川の氾濫、堤防の決壊という形でのものが多かったのですが、最近は都市内水害とあって、都市部にある下水があふれたり、地下浸透ができないで遊水するとか、地下街に流入するというようなものまであります。そして、水災害は、大量の水が供給されるというだけでなく、様々な地盤災害、衛生環境の悪化を引き起こします。特に、最近の事例では、大きな河川沿いに造成された住宅地が、堤防の決壊で浸水するという大災害がありました。造成前は、河川の氾濫原、後背湿地であったところで、かつては遊水地的なところでもあったところでした。造成はわずかな盛土によって形成されていますので、河川からの溢水では、水没するようなことになり、河川堤防だけが砦というような環境のところでした。堤防の決壊は、堤防自体の耐久力や堤防の土質のリスクなどがあって、短期間に多量の雨量には耐えられない場合があります。このような個所についての土地利用は、旧地形を勘案して、ハード対策の限界をにらみつつリスクを特定しながら対策をするということ、あるいは土地規制をかけるというようなことが必要かもしれません。ある意味では、土石流危険渓流の出口を住宅地にするようなものと類似しているように思われます。

豪雨災害で代表的なのは繰り返される土砂災害ではありますが、意外と身近なところで起きるのが、アンダーパスでの車の水没事故です。その要因は、車社会になったこと、事例を理解していないこと、都市構造上アンダーパスが増えていることによるものです。運転者は支障ないと思われる水深でも、侮ると、自分自身が脱出できないこともあるし、危険な水害になっています。

また、最近あった例では、道路の沈下や陥没で、浸水してもすぐには兆候が見られずに、時間が経ってから、盛土の部分などで吸い出しを受けて、突然に陥没になるということもあるようです。また、夏などに多いといわれているゲリラ豪雨による増水事故ですが、水場で遊ぶ時には上流などでの気象の変化や避難の方法を確認しておくことも大事なことになります。地域防災には、地域がどのようなリスクがあるのかを知っておくことに加えて、頼りは気象庁の予報です。最近新しいメガスーパーコンピューターの導入で、気象計算が格段にアップして処理ができるようになってきました。そして、地区ごとの降水分布を予測するところの「降水短時間予報」も精度も上がって、かなり先までを予報することができるということで、対策準備の上ではありがたいことです。ただ、そうすると我々は、危険への感覚、危機感が鈍くなったり、本来の臨機応変な行動ができずに依頼心が高まるということも、気になるところではあります。情報との付き合い方というか、利用の仕方を上手にしないと、情報が途絶えたりしたときには、裸で道中なるものかを実感することになるようにも思えます。